

食の「安心」とは…

食品安全委員会委員長 見上 彪

■ 両語併記に疑問

昨今、食の安全・安心という四字熟語(?)にいろいろな場面で遭遇する。特に政府の広報、マスコミの論説、メディアの報道等で多用され、これを受けてか一般国民、消費者団体、食品製造業者等がおうむ返しのように使っている。この言葉は抽象的・文学的な表現が好きで、物事をはっきり言うことを必ずしも良しとしない日本人の感性に合うようだ。浅学非才の私にとっては食の「安全」と「安心」を、区別せず、どうして多くの人々が一緒に並べ論じているか理解に苦しむ。

■ 「安心」は画一化できるのか?

食の安全は科学、食の安心は人の心の問題ととらえれば良しとする。平成18年11月1日東京大学大学院農学生命科学研究科に新設された食の安全研究センターのパンフレットによると『食の安全はあくまでも科学的な評価によってもたらされるものであり、食の安心は情報の公開・提供・危機管理の方策などによってもたらされるもの』と説明しているが、特に食の安心以下の解説は本当であろうか? 個人によって全く違う安心感が画一的な方

策でもたらされるものだろうか? なんとなく自分にとって不都合なことはすべてお上の責任にする風潮と一脈相通じるような気がしてならない。

■ ありえないゼロリスク

食品安全委員会の主務は食品を摂取することにより人の健康に及ぼす影響について科学的に評価、すなわち太字の語を順に並べた食品健康影響(リスク)評価を行う機関である。リスクは健康への悪影響が生ずる確率と程度のことであるので、委員会の主要な任務はリスク分析を通して食の安全性を科学的に追求することだが、安心は国民がいかにかんじるか(安心感)である。「食の安全」はデータに基づいて科学的にそのレベルを判定することが可能だが、「食の安心」については客観的な論議ができない。言いかえれば食の安全は委員会、食の安心は国民の専決事項だと思う。例えば、「もともと100%安全な食べ物はない」ことは当然であり、塩はなければ人は生きられないが、多量にとると死んでしまう。ところが多くの日本人は限りなくゼロリスクを求める。これが日本人の食べ物に対する安心感なのかも知れない。

■ 安全と安心は別なもの

安心のレベルは個人によりまちまちであり、従って、そのための対策も千差万別にならざるを得ない。検出限界のある血清学的診断法を用いたBSEの全頭検査がイコール安全・安心担保といった非科学的な情報を正しいものとして受け入れ、さらに牛や野菜のトレーサビリティはそれぞれの生産・流通履歴にすぎず、ましてや安全性を担保するものではないにもかかわらず、生産者の顔写真や生産記録を見て、どうして安心できるのかが私にはわからない。

とは言え、冒頭でも申し上げたとおり、「安全」と「安心」を併記して使用したのはそもそもマスコミや行政側である。その四字熟語(?)が一人歩きし、多方面にわたって使用されている今、「安全」と「安心」を同意語ととらえられるのは無理もないことかもしれない。しかし、繰り返しになるが、「安全」は科学的な評価によってもたらされるものであり、一方、「安心」は人それぞれの判断に委ねられるものであるということ、今一度お考えいただきたい。



食の安全への不安・疑問から情報提供まで、皆様のご質問・ご意見をお寄せください。

食の安全ダイヤル 03-5251-9220・9221

●受付時間:10:00~17:00/月曜~金曜(ただし祝日・年末年始はお休みです)

ご意見等は電子メールでも受け付けています。ホームページからアクセスしてください。

食品安全委員会ホームページ <http://www.fsc.go.jp/>

食品安全委員会 e-マガジン 食品安全委員会の活動などがわかるメールマガジン。ホームページから登録できます。